

高原農業研究所

I 基本方針

高原地域の農業は、広大な農地と草原の景観に代表される冷涼な自然条件を生かし、畜産、水稻、野菜を中心とした営農が行われている。

水稻では良食味米「コシヒカリ」を中心とした特別栽培米の生産が積極的に行われているが、近年では地球温暖化の影響で品質低下が危惧されている。また、業務用米等の新たな需要が出現し、それに対応した最適品種の選定要望が高まっている。

野菜では露地や施設において冷涼な気候を活かした多彩な品目が栽培され、夏季の重要な野菜供給基地となっている。しかし、近年の地球温暖化による猛暑が施設夏秋野菜の収量や品質の低下を招いている。

高原農業研究所では、これらの課題を解決するために土地利用型作物の水稻、麦、大豆では、優良品種の選定を行う。また、水稻優良種子の安定供給のために水稻原原種を生産する。

施設園芸では、イチゴやトマトの安定多収のための栽培技術確立や高温対策技術を確立する。加えて、中山間地で稼げる品目として注目が集まる湿地性カラーの秀品率向上技術を確立する。

II 重要研究事項

1 くまもと農業の未来発展につながる新品种の開発・選定

水稻では、倒伏しやすく生産が不安定になりがちな「コシヒカリ」の欠点を補う新たな良食味品種を選定する。

大麦では、低温に強い栽培特性や品質に優れた品種の選定を行う。

大豆では、後作大麦の適期播種が可能となる品種を選定する。

トマトでは、夏秋栽培で収量性に優れ不良化（裂果等）の発生が少ない品種を選定する。

2 生産性の向上を目指した革新的な生産技術の開発

水稻では、「くまさんの輝き」移植時の労力軽減が可能な疎植や高密度播種の低コスト技術を確立する。また、高温登熟性に優れ多収な水稻極早生品種「にじのきらめき」を活用した作期拡大技術を確立する。

イチゴでは、本県育成品種「ゆうべに」の着色不良果（まだら果）発生を抑制する栽培管理技術を確立する。

トマトでは、さらなる増収を目指した生産技術の開発を目指し、栽培後期の収量確保技術を確立する。

湿地性カラーでは、本県育成「熊本FCO3」において、切り花長を確保する生産技術を確立し、無加温栽培で稼げる花き生産を目指す。

Ⅲ 試験研究課題一覧

【高原農業研究所】

部門	大課題	中課題	予算		小課題	試験期間
			金額	区分		
水田作	1. くまもと農業の未来発展につながる新品種の開発・選定	(1) 水稻等の優良品種の選定	885	県単	① 優良品種の選定（水稻、大麦、大豆） ② 水稻の作況調査	S48～継続 S48～継続
		(2) 生産者・消費者ともに喜ばれる水稻品種の育成（再掲） 「農産園芸研究所」 「高原農業研究所」	423	県単	① 病害抵抗性等の付与	H21～継続
		(3) 主要農作物種子生産改善対策事業（再掲） 「農産園芸研究所」 「高原農業研究所」	農産園芸課	令達	③ 水稻、麦類、大豆の原原種系統選抜及び原種審査	S27～継続
	2. 生産性の向上を目指した革新的な生産技術の開発	新規 (1) 阿蘇地域の「くまさんの輝き」における収量・品質を維持した低コスト栽培技術の確立	1,164	県単	③ 疎植と高密度播種を組み合わせた栽培技術の確立	R8～R9
		新規 (2) 高冷地における水稻作付面積拡大を可能にする「にじのきらめき」の多収栽培技術の確立	2,118	県単	① 作型毎の収量を最大限にする最適な施肥量の解明	R8～R10
野菜・花き	2. 生産性の向上を目指した革新的な生産技術の開発	新規 (1) 準高冷地におけるイチゴ「ゆうべに」の着色不良果対策技術の確立	1,423	県単	① 現地圃場における着色不良果発生状況の解明 ② 着色不良果対策技術の確立	R8 R8～R10
		(2) 夏秋トマト栽培のさらなる増収を目指した生産技術の開発	1,534	県単	① 安定生産に資する夏秋トマト品種の選定 ② 夏秋トマトの後期収量確保技術の開発	R7～R9 R7～R9
		完了 (3) 特産花きにおける無加温栽培の普及技術と作型開発（再掲） 「農産園芸研究所」 「高原農業研究所」	1,261	県単	① 無加温で冬春出荷が可能な果育成湿地性カラーの普及拡大に向けた技術開発	R6～R8

注) **新規** : 本年度から新たに取り組む課題

延長 : 課題設定時の完了予定年度を延長して設定する課題

完了 : 本年度で完了する課題

組替 : 課題設定時の課題を組み替えて設定する課題

繰上 : 課題設定時に設定した年度より早く、今年度完了する課題

中止 : 今年度中止する課題